

はじめに 「信ずることと疑うこと」の後半です。「神が義であり、より高く、意味深い配慮が、わたしたちの人生に向けられている」という(神の摂理にたいする)聖書の主張は信じるに値するかを、ティーリケは、義人ヨブの苦難を題材にして考察します。ちなみに「ヨブ記・箴言・コヘレトの言葉」は旧約聖書の中では知恵文学と呼ばれます。知恵はわたしたちの生活を肯定的に促進する先人の英知であり、たとえば「急がば回れ」とか、「早起きは三文の得」といった経験則の集成です。これに対してヨブ記は知恵の「破れ」を扱っています。つまり、経験則に従っても上手くいかない、因果応報でない現実、悪人が栄え、善人が苦しむように思われる世の中に、神はおられるのかという、わたしたちが不条理だと感じる苦難の意味に切り込むのがヨブ記なのです。ティーリケはそこから苦難のエッセンスを抽出し、人間がどこで折れるかを読み解きます。では、後半をどうぞ。

いつまでも続く苦難は、人を嘲笑するような問いを発する。「お前の神はどこにいるのか」(詩42:3)等。時は、苦難の無意味さの告知者として誘惑者の決定的手段となります。無意味さこそ、神の存在証明、神の意味深い配慮のもとにある生という見解に対するもっとも強力な反駁になります。なにより生まれつきのわたしたちの人間性そのものが、神を裁こうとする主人であろうとする性向があり、神ではなく、わたしたちの理性(それは意味の告知者そのもの)が誘惑者に味方をするのです。誘惑者は時の助けを借り、彼の苦難がながく続くことを利用して人間を、神への信頼が不条理であり、神を呪うような地点へ容易に導いてゆきます。さらに苦痛がわたしたちの理性を軽々と吹き飛ばします。苦悩は、わたしたちがはっきりとした理性をもっていて、自分の考えを保ちうる限り教育的ですが、苦難が持つ意味は、肉体的な苦痛がある限界をこえただけでその意味を失います。苦痛が限界に達すると、もはや問題を、問題でなくしてしまうのです。苦難にはある段階があり、それ以上は、人は苦難によっては豊かにはならないのです。そして、それゆえに、神を何らかの意味のために、すなわち、あえて言うならば、自分自身に対する信仰の意味で信じていたような人は、神が悩める時の依るべき港ではなく、すぐに神を離れてしまいます。(下線部横山)

わたしたちは最初から疑う者なのです。わたしたちは自分自身を信じるのと同じ程度、神を疑っています。(中略)わたしたちは、自分たちが神と同じに創られていると信じています(創世記3:5)。そこで、わたしたちは誘惑者、この疑いの天才と語りあいます。「本当に、神は取って食べるなど言ったのか」。そして神を疑うに至るのです。誘惑の時、それはわたしたちが自分を信じ、わたしたちが自分を疑うことをやめ、したがってまさに神を疑う時です。それはわたしたちの時であり、暗黒の力です(ルカ22:53)。

わたしたちはたとえ疑いを打ち消すような証拠をいくら集めても、それによって疑いの念は晴れないでしょう。神の御子が、わたしたちに、彼とわたしたちの父との平安を持ち帰って下さらない限りは。(この稿、おわり)

※「神の沈黙」第一章の終わりです。機会があれば残りの中からも紹介します。